

シンボリック・メディアの形成とモダニティ ——ダブル・コンティンジェンシーとディアボリック・メディア——

三 上 剛 史

Modernity and Symbolic Media ——Double Contingency and Diabolic Media——

Takeshi MIKAMI

要 約

本稿は、近代社会の成立とともにその有効性を増大させたシンボリック・メディアの形成に焦点を当て、これを<シンボリックなもの/ディアボリックなもの>という視点から再検討しようとするものである。そのような理論的検討が求められる背景には、現代社会独特のリスクや新たな分離と個別化、個人化などの現実がある。

我々は、時代を論ずるにあたって、まず分離の形態に目をつけなければならないのではないか。近代社会はシンボリックなものが主導することによって生成してきたが、現代社会学は、新しいタイプの分離に対応した社会関係のあり方を見いだされねばならない。本稿はその準備作業として、まず、近代社会においてシンボリック・メディアが機能せねばならなかったのは何故かという問題を設定し、これをディアボリックな契機から見直すことで、問題解決に一定の見通しを与えようとするものである。

キーワード：シンボリック・メディア、ダブル・コンティンジェンシー、
ディアボリックなもの、契約の非契約的要素

はじめに

本稿は、執筆者が近年に発表した「ディアボリズム」に関する諸論考をより精緻化し、いっそうの理論的深化を目指そうとするものである。

念のためにこれまでの理論的展開を振り返っておくと、まず「ディアボリックなもの」と「シンボリックなもの」(三上、2012)においては、“ディアボリックなもの”(分離と個別化を生む契機)という概念が前景化され、これまでの社会学で一般的であった“シンボリックなもの”(結合と連帯を生む契機)に対置された。また『社会学的ディアボリズム』(三上、2013)では、現在進行しつつある「リスク社会」の進展と、それに伴走する「個人化」、およびその理論的・現実的帰結としての「監視社会」をテーマとして、ディアボリックな視点から見る現代社会論が提示された。

更に、「公共圏と親密圏のディアボリズム」(三上、2014a)においては、この視点が「公共性と親密性」の問題に拡大され、社会学が現代社会を捉える際に採用すべき理論的前提として、シンボリズムが一定の限界に達していることが示唆された。同時期に刊行された他の著書・論文も、それぞれに扱うテーマは異なっているが、同趣旨である。

上記の諸論考では、主として「リスク」「監視」「公共性」などの現実的諸問題を視野に入れて、これに社会学理論がどう対応すべきなのかという点から、“ディアボリックなもの”の重要性が論じられている。しかし、そこで十分に展開できなかったのは、そもそも近代社会は、どのように<シンボリックなもの/ディアボリックなもの>という二項対立を利用して形成されてきたのかという問題である。

この点が説得的に解明されなければ、「近代の限界」「ポストモダン」「ポスト-ポストモダン」などの時代規定も、その意義を減ずるであろう。20世紀末以降の社会をいわゆる「ポスト近代」的な社会と見ることの是非については、幾つかの見解があり、N・ルーマンのような、どう見てもポストモダン系の理論としか見えない理論家でさえ、近代は連続しているという視点を堅持している。あるいは、A・ギデンズやU・ベックは「第二の近代」「再帰的近代」という、やや便利すぎる用語法でこの問題を迂回している。J・ハバーマスのような規範主義的な、ポスト近代的な時代らしい「最後の近代主義者」も居る。

ポスト近代的な理論志向は、「脱工業社会」「消費社会」「情報社会」という現実を踏まえて、「ポストモダニズム」というやや流行思想的な色彩を帯びながら展開されてきたが、「ポスト」という語を使用するかどうかという言葉遊びの論難を別にすれば、時代が大きな境目に差し掛かっているという認識は、概ね共有されていると言ってもさしつかえないだろう。

しかしながら、「ポスト」という認識を支えていた現実としての「脱工業社会」「消費社会」「情報社会」に対して、新たに「リスク社会」「個人化」「監視社会」という状況が出来つつある。この状況認識は、それ以前の脱工業社会論、消費社会論、情報社会論などとは別の仕方、「近代」の“終焉”（もしくは“変質”）を示唆することになった。

本稿は、これを＜シンボリックなもの／ディアボリックなもの＞という対比的視点から、特に近代社会以降に有効性を増大させた諸シンボリック・メディアの形成に焦点を当てて、再検討しようとするものである。その際、論考の全体を支える基本的視点は、現代独特の新たな分離と個別化が、改めて、近代的シンボリズムを超えて、ディアボリズムに立つことを求めるという主張である。

先に結合があるべきなのではなく、新しい形の特定タイプの分離（ex.近代的な社会関係、ポスト近代的な社会関係）が先に発生し、それが特定タイプの結合（接続）を生む、あるいは要請すると言うべきではないか。我々は、時代を論ずるにあたって、まず分離の形態に目をつけねばならない。先行した時代に特徴的なタイプの結合が喪失されたことを嘆くのではなく、今進行しつつある分離の性格をこそ見定めるべきである。それが、新しいタイプの分離に対応した接続形式を見出す道となる。

阪神・淡路大震災、東日本大震災を受けて求められる社会理論もまた、単に「絆」や「連帯」の再興を叫ぶだけでなく、このような視点に立った、ディアボリックな契機（分離と個別化）の直視が必要であろう。

I シンボリズムとダブル・コンティンジェンシー

1 象徴性と悪魔性

シンボリズムという用語はよく知られた言葉であり、改めて説明を付すまでもないが、例えばT・パーソンズは、貨幣を「一般化されたシンボリック・メディア」(generalized symbolic media)として規定していた。これはルーマンにも継承されている概念であり、シンボリックなものは結合と連帯を生む契機として、広く社会理論一般に共有されていると言えよう。

ルーマン流の定義をすれば、シンボルは「異なるものの一体性(Einheit)を可能にする意味形式」あるいはその一体性そのものであり、差異が解消されたり溶解されたりすることなしに、分離したものを一つに結び合わせる働きをしている (Luhmann, 1988, S. 257)。

ルーマンはこのシンボルという概念に「ディアボリック」(die Diabolik: 悪魔性)という新しい概念を対置した。

「悪魔性は、何よりも、貨幣が他のシンボル、例えば隣人間の互酬性……などのシンボルと置き換えられ、それらを干からびさせる点にある。つまり、悪魔性は普遍化に必要な特殊化(Spezifikation)の中に存するのである」(ebd., S. 242.)。そして、違いを作り出し分離する働き、

調和と統合を崩し、秩序と安全を破る契機を「ディアボリックな」(diabolisch)ものと呼んだ⁽¹⁾。

ここでは貨幣は、互酬性や道徳的義務などの、交換の「社会性」(Sozialität)を弱められ、「社会性が奪われる」ことによって、逆に一定の限定された特殊な選択性を強化している。一般的意味での社会性を奪われることによって、別の意味での新しい特殊な社会性を獲得しているのである。

それゆえ、貨幣のように「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアは、悪魔的に一般化されたコミュニケーション・メディアである。結びつけるものと分離するものは同時に意識されるのである。何よりもまず、象徴性と悪魔性は分かち得ない一体性を成して、一方は他方なくしてはあり得ない」(ebd. 259)。シンボリック・メディア⁽²⁾は、同時にディアボリック・メディアでもあるということになる。

この着想の源泉は社会学史的にはG・ジンメルにあるはずである。ルーマンはその点に触れていないが、ここでジンメルの功績を振り返っておくことで、ジンメルからルーマンに引き継がれているディアボリック視点を再確認したいと思う。

ジンメルは『貨幣の哲学』において、「貨幣経済は、一方では、その無限の柔軟性と分割可能性によって、あの多様な経済的依存性を可能にし、他方では、その無関心で客観的な本性によって、人間同士の関係から人格的要素を引き離すことを促進するのである」(Simmel, 1900, S. 395)と指摘している。

ルーマンにおける“象徴性と悪魔性の一体性”という議論により近い指摘は、貨幣論よりもむしろ『橋と扉』において、明瞭かつ簡潔になされている。我々があるものを“分割されている”と見なすとき、我々はすでに意識の中でそれらを相互に関連づけているのである。……逆に、結びついていると感じられるのは、あらかじめ何らかの形で相互に分離させている場合のみである。物事が繋がりを持つためには、それらはまずもって隔てられていなければならないのである」(Simmel, 1909, S. 1)。ジンメルは切ることと結ぶことは同じ事柄の二側面であり、結合は同時に分離であると指摘していた。

このジンメルとルーマンの指摘から我々が学ぶべき事柄は、貨幣に代表される「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」は、シンボリックなもの⁽²⁾とディアボリックなもの⁽¹⁾の一体性としてあり、それゆえに“結合と分離”という両義的性格を備えたものであるという点である。

そしてルーマンがジンメルに付け加えた理論的貢献は、ジンメルがここで指摘している貨幣の両義性を、<特殊化による一般化>(悪魔的一般化)と規定して、象徴的一般化との違いを明瞭化したことにある。ディアボリックな一般化とシンボリックな一般化は、単に両義的一体性を形成しているだけでなく、限定による一般化と、包摂による一般化の相違として区別される。ディ

アボリックな一般化は、特殊化による限定された側面において、強固な一般性を獲得するのだという主張である。この論点を明確化しておくことが重要であろう。

2 特殊化による一般化

このように、近代社会において一般化した“貨幣”のようなコミュニケーション・メディアは、「象徴性と悪魔性」＝「結合と分離」という両義性を備えているということ、そしてその両義性の意味が、ディアボリックな一般化の持つ＜特殊化による一般化＞という契機の重要性に見出されるという指摘が既になされていた。

しかし我々は、この指摘から更にもう一步進んで、“分離を前提として初めて結合が可能になる”という視点の強調へと進むべきではないだろうか。モダニティの変容あるはポストモダン、ポスト-ポストモダンという時代認識は、そのような社会認識を要請しているように思われる。本稿では、これをリスク社会・個人化社会・監視社会などの現代社会の状況認識と関わらせながら、近代社会の生成と変質という観点から論じたい。

ルーマンのシステム理論に沿った記述をするならば、貨幣、権力、(科学的)真理そして愛などのメディアは、近代社会において経済、政治、科学、小家族などのシステムが自律することを可能にしてきた「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」である。

そして『社会の経済』などで追加された論点は、これらのコミュニケーション・メディアはシンボリックな結合だけでなく、その反対物であるディアボリックな分離的側面を孕み、正にそのような二つの契機が作用することで、近代的なシステム分化と社会関係を形作ってきたという点である。

但し、表面的な観察においては、行為者を動機づけるシンボリックな側面を際立たせる形で分化・自律したメディアが、近代的な結合と連帯を生み、それによって近代的な社会関係と秩序が形成されてきたというふうに見える。そしてそのような社会認識が、価値・規範・共同体・連帯などのシンボリックな諸概念の動員に繋がっていた。

これまでの社会学、とりわけパーソンズに代表される、ポストモダン期に至るまでの20世紀社会学の主脈においては、共有価値 (common value) とその内面化によって社会関係を説明するタイプの理論が優勢であった。

社会的行為は「ダブル・コンティンジェンシー」(二重の条件依存性、二重の不確定性)を不可避免的に伴っている—コミュニケーションする二人の人間は、相互に相手の出方を予測して行為せねばならず、私から見て相手はどう出るかは偶有的・不確定 (contingent) であり、同時に、相手から見て私の出方は不確定である。

パーソンズにおいては、このような不確定性は行為者相互に共有されている共有価値によって

解決される。「ダブル・コンティンジェンシーは、共有されたシンボリックなシステム (shared symbolic system) が持つ規範を志向しており、……このシステムが文化の最も基本的な型となる」(Parsons/Shils, 1952, p.16)

同一の文化の下に生活する行為者同士は、お互いにどのような場合にどのように行動するかを了解しており、そのような共通の価値を基盤とした行動予期が、コミュニケーションの開始と接続を可能にしているということになる。

しかし、後に検討するように、そしてルーマンが既に指摘しているように、貨幣によるコミュニケーションにおいては、貨幣がメディアとして機能してさえいればそれでよく、経済的コミュニケーションが共通の文化的価値という「大きな物語」に包摂されている必要はない。貨幣は、経済活動を動機づけ媒介するメディアであり、それ以上のものである必要はない。そして経済や政治の各機能領域のコミュニケーションが成立するために、貨幣のシンボリックな機能と、権力や真理などのシンボリックな機能が、文化的な共有価値に収斂しなければならないという理由もない。

パーソンズの理論体系では、経済システムによる財の交換、法による権利義務体系の整備、政治による集合的意思の調達などの機能分化が、文化的価値による一元的秩序という図式に収斂してゆく。É・デュルケームもまたそうであったように、宗教的秩序による包摂から社会の機能分化へと移行する時代の論理であるように目える。デュルケームはそれを道徳に託し、パーソンズは価値と呼んだ。パーソンズが共有価値と考えていたものの中味は、さしあたりは、「アメリカ的活動主義」と呼ばれる、カルビニズムの宗教性を下敷きにした、一連のアメリカ的な市民の価値観を現しているようである。

近代という時代は、そのような諸領域が共有価値に収斂することが可能だと想定してきたし、またそれを求めた時代であった。近代社会の自己意識として発展してきた社会学の理論もまた、それを説明する理論であった。近代がその内実を失い始めた時になってようやく、「大きな物語」の不在と、各コミュニケーション・メディアの自律とが認識されたのであり、コミュニケーション・メディアの理論もまた時代の要請に応じて変化したと言うべきである。

3 契約の非契約的要素

もちろん、デュルケームが『社会分業論』で強調し、後にパーソンズが「契約の非契約的要素」と呼んだものが無いというわけではない。確かにデュルケームが言うように、契約それ自体は諸個人の自由な意志に基づいているとしても、契約を契約たらしめ、社会的な権利と義務の関係として成立させるための、社会から生ずる契約の規制力があってはじめて契約が可能になるという点も否定はできない。

パーソンズはこれを共有価値として引き継いだ。しかし、貨幣が交換メディアとして機能するという共通認識は、共有価値と呼ぶほどのものであろうか。もしそれを特定の価値観とするな

らば、社会には、数えきれないほど多くの価値があり、そして、それらの多くは必ずしもパーソンズが考えているように収斂するわけではない。何もかも社会的な価値とするのは、概念の不当拡張である。

貨幣の機能は、むしろ、様々な価値観や社会的背景を超えて流通することにあるはずである。価値観が異なろうが、敵対する相手であろうが、貨幣を使用することによって交換を可能にするということが貨幣の社会的機能である。貨幣は、共有価値のいかにかわらず機能するからこそ意義があると言える。それゆえ、このような貨幣の機能を正しく認識するためには、デュルケーム＝パーソンズ的な規範的要素に囚われずにダブルコンティジェンシーを検討したほうがよい。

言うまでもなく、パーソンズ的な理論構成の有効性は疑問視されて既に久しく、20世紀後半の「ポスト・パーソンズ期」の社会学諸理論においては、パーソンズ的なグランドセオリーが批判され、更に1970年代以降のいわゆるポストモダン期においては、構造・主体・共有価値などを標榜する社会理論は、“近代的”社会理論として徹底的に批判された。

そういう意味では、ポスト・パーソンズ期以降の社会学は、共有価値による統合という理論構成が失墜してゆく過程を辿ったと見ることができる。ただその場合も、共有価値とその内面化を志向する理論構成は、批判者達と対抗関係に立ちながらも、一種の入れ子状態を形成しながら、拮抗しつつも共存する形をとってきたというべきであろう。

なぜなら、広い意味でのポストモダン型（A・ギデンズなど、その言葉を使用しない社会学理論も、広い意味では、ポストモダン型理論に含まれる）の社会理論構成の多くにおいて、依然としてシンボリズムは生き永らえており、“近代”型のシンボリックに構成された社会が終焉しつつある情勢下においても、いかにして新たな形での結合と連帯が可能であるかを模索し続けているからである。

それゆえ、「ポスト近代」や「近代の変容」を主張する社会理論の多くが、両立の難しい二重性を抱えている。表面的には20世紀型の「共有価値」や秩序観を批判しつつも、基層には、いかにして連帯を可能にするかという「シンボリズム」志向がある。

パーソンズに代表される《包摂・内在》型の社会理論（社会が個人を包摂し、共有価値が個人に内在化されるという理論構成）は、批判に晒されながら徐々にその理論的影響力を減じていったが、シンボリズム志向は依然としてその影響力を失っていない。

そこに、“共有価値が困難であるからこそ”、いかにして新たな連帯と結合が可能かを模索するタイプの理論が台頭する。U・ベックのように、「第二の近代」を標榜しつつもデュルケームに回帰し、コスモポリタニズムと個人化を両立させようとするタイプの社会理論も、そのような理論構成の一つである⁽³⁾。この場合には、デュルケーム的な「人間性の宗教」に裏打ちされた新しいコスモポリタニズムが、パーソンズ的な共有価値に替わる新しい共有価値として要請されて

いるように見える。ただ、バック自身はそういう言い方を好まないようである。

Ⅱ ディアボリックなもの二つの位相

1 顕在的位相

ルーマンのシステム理論においては、「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」
として、典型的には（経済システムの）貨幣、（政治システムの）権力、（科学システムの）真理、
そして（親密圏の）愛の四つが取り上げられている。それらは、＜受容／拒否＞の不確実性を、
受容に向けて動機づける働きをしている。これらのメディアは象徴的一般化の働きによって、万
人にその受容を動機づけ、獲得を志向させるのである。

この点に加えて、更にルーマンがコミュニケーション・メディアのディアボリックな面として
注目するのは、主として貨幣と愛についての論考においてであるが、そのディアボリックな契機
には、ルーマン自身が明確には区別していない二つの位相がある。

ジンメルもルーマンも共に指摘していたのは、貨幣メディアの持つ分離の働き、すなわち、違
いを作り出し分離する働きであった。貨幣においては、経済的交換において、貨幣メディア以外
の要素を切り捨て、互酬性や義理・人情などの他の社会関係を捨象することがディアボリックな
契機とされていた。そのせいで、貨幣は人間味を欠いた冷たい交換メディアとされ、その疎外的
側面が批判的に取り上げられることが多い。

もちろん、ジンメルとルーマンは、それが貨幣による経済システムの形成に貢献しているとい
う面を強調するのであるが、表面的に現れた貨幣のディアボリックな側面は、他のメディアや社
会的文脈の切断という点に顕著に現れている。

愛の場合も同様である。ルーマンの『情熱としての愛』は、「愛」（主として想定されているの
は、恋愛や夫婦関係にある親密な相互作用である）を貨幣、権力、真理などと同様の、象徴的に
一般化されたコミュニケーション・メディアとして捉える点で、他のどの親密性論にもない新た
な観点を提供している。貨幣と同様、近代社会において、親密な関係性を形成するための特殊な
メディア（愛）が分出したことに、ルーマンは意義を見出している。

愛は親密な関係において機能するメディアであり、＜愛されている／愛されていない＞(geliebt
／nicht geliebt) という二元コードを用いて、親密な関係性の不確実性を解消するメディアとし
て働く。

それは、貨幣というメディアの使用によって物の所有権とその移動が確定するのと同様の出来
事である。人は愛を告げることによって、あたかも貨幣を使用するが如く、愛の存在を確認し合
うことができる。愛を表現する言葉や行動は、愛というメディアをコミュニケーションすること
で、愛されているかどうか分からないという不確実性を解消している。

愛は、その独自の一般化されたシンボリックな作用によって、人と人を結びつけ親密な関係を形成させる（接続させる）メディアとなるが、親密圏が愛を主たるコミュニケーション・メディアとし、身分・親族・共同体などの呪縛から解放されればされるほど、愛以外の社会関係から当人達を引き離すという作用がある。

貨幣と愛に典型的に見られる、このような意味での“他の社会関係から切り離す作用”を、ここではディアボリックなもの「顕在的位相」と呼んでおく。はっきりと意識され目に見える形で社会関係の限定と特殊化が作動しているからである⁽⁴⁾。

2 基底的位相

(1) 貨幣が仲立ちする<分離と結合>

ディアボリックなもの基底位相は、顕在的位相とは異なり、直接にダブル・コンティンジェンシーに関わるものである。

貨幣を例にとるならば、貨幣が持つ「特殊化による一般化」の顕在的位相においては、他のメディアを排して貨幣以外の社会関係を捨象することにそのディアボリックな面が現れている。しかし、それに先立つ社会的要素として、そもそも貨幣がメディアとして機能するのはどのようにしてかという基底的な位相がある。そしてそれこそが、デュルケームの「契約の非契約的要素」やパーソンズの「共有価値」に替わる説明となる。

貨幣は<支払う／支払わない>という二元コードによって、物の交換と所有権の確定を可能にしているというのが、ルーマンの説明である。その際、貨幣には、それを追求することを動機づけるシンボリックな意味づけが付与されており、それゆえに、貨幣を媒介とした交換がスムーズに進行するというものである。それが、貨幣メディアが有する、ダブル・コンティンジェンシーを克服するシンボリックな働きである。ルーマンのこの議論の進め方について、ここで付け加えるべき批判的論点はない。

本稿で強調したいのは、このプロセスに介在するもう一つの重要なディアボリックな要素である。この点を明らかにすることが、共有価値に依存しないメディアの存在をよりうまく説明するように思われる。そもそも、貨幣がシンボリックな働きを“担わなければならない”のはどうしてか？

言うまでもないことであるが、貨幣によって交換のコミュニケーションがなされねばならないのは、売買する人間やその所有権が分離しているからである。個人単位の労働と個人による財の所有が一般化する「所有の個人主義」が根底にある。資本主義的な「所有の個人主義」が近代的個人主義の源泉の一つであり、「諸個人が自分の能力と技術によって生きるという、個人と社会

の分離を作り出した」(Burkitt, 2008, p. 2)。

土地や物、サービスなどが共同体と親族・家族によって所有・供給されるシステムでは、個々人が自由に財やサービスを交換しあうという状況は一般的ではない。また、近代化による都市の形成や移動の自由がなければ、見知らぬ他者と頻繁に交換のコミュニケーションを行う必要も生まれない。それまでの時代には無かった近代社会の新しい要請に応えるべく登場したのが、貨幣経済の進展である。

つまり、人々が財を“共有”することが難しく、皆で所有するという体制が維持されないがゆえに、個々人は匿名的他者との売買というダブル・コンティンジェンシーに向き合わねばならなくなる。そうであるがゆえに、貨幣という交換メディアを必要とした。所有が個別化していない状態から、所有の個人主義に移行し、それゆえに分離され個別化された所有は、再び貨幣という一般化された(どこでも誰でも使用可能な)メディアによって結びつけられなければならない。

すなわち、近代的所有様式という、経済的分離の様式が一般化することによって、貨幣の「特殊化による一般化」という結びつけの機能が要請される。もちろん、貨幣のそのような機能があるからこそ、所有の個人主義が可能になったという逆の側面もあるが、大きな因果の道筋としては、所有の分離と個別化が貨幣による接続を要請したと見ることができよう。

貨幣のシンボリックな側面にのみ注目する理論は、所有の近代的分離が貨幣による近代的結合を生んでいるという、ディアボリックなものの基底的地位を見逃している。

(2) 愛というメディアによる再びの“結びつけ”

愛についても同様の事柄が指摘できる。愛のコミュニケーションにおいて顕在化するディアボリックなものは、愛以外の他のメディアや身分・階層等の社会関係から、当人達を引き離すという作用があり、また親密圏におけるその開口部は、様々な諍いや暴力などの形をとって社会問題化している。

しかしながら、貨幣の場合と同様、人々が愛によって“再び結びつけられねばならない”のは、個々人の心情的結合が分離されているからだと言うことができる。愛し合う双方の心がそもそも別箇の存在であって、決して混じり合うことのない独立したシステム(個人意識のシステム)であり、それゆえに恒に不安定で離反の危険に晒されているという事実が指摘できる。愛し合う両者の心が一つ“ではない”から「愛」が求められる。

ここにも貨幣と同様の「愛」の近代化という社会史的な論題が登場する。この点については、ルーマンの『情熱としての愛』をはじめ、ギデンズの『親密圏の変容』など、近代的な愛の生成と変化についての多くの業績があるので、ここで改めてそれを辿ることはしない。

ごく一般的に整理するならば、共同体から個人が分離し、個々人が自由に、個人主義的に愛を求め配偶者を選択するというシステムができ上がった、という歴史的経緯がある。そこで個人が

直面するのは、情情的コミュニケーションの場面で発生するダブル・コンティンジェンシーである。ルーマンが『情熱としての愛』で詳しく説いているように、(近代的な意味での)愛は自他の了解不能性を作動因としている。

近代人はお互いが“同じ心”を抱いているというノスタルジーから離脱することを求められる。他者とのストレンジャー同士のコミュニケーションにおいて、共同体的・同族的・家族的共感の共有を想定することは困難である。ましてや、愛のような微細な情情的コミュニケーションにおいてはなおさらである。個人化が進んだ現代の親密圏では、家族内においてさえ、家族的共感を維持し続けるのは簡単ではない。

愛によって結ばれるべき二人の人間の間には、貨幣による売買が成立する場面と同様のダブル・コンティンジェンシーが存在している。この手詰まり状況を打破するのが「愛」というメディアである。愛を語り、愛にふさわしい行動をとることが、あたかも貨幣を交換するのと同じような効果をもってコミュニケーションの接続を可能にしている。貨幣を支払うように“I love you”と言さえすればよい。これほど簡単なコミュニケーション・メディアはないとも言える⁽⁵⁾。

Ⅲ ダブル・コンティンジェンシー再考

1 分離されることが結合の条件である

貨幣と愛についての上記の考察から、以下の点が明らかとなる。これらのメディアが関与するダブル・コンティンジェンシーは、ディアボリックなもの基底位相に関わる出来事であり、シンボリック一般化は、このような分離を前提としてはじめて成り立っている。「社会システムは、まさに、その基底において状況の現実性が存在せず、また、確かさの上に築かれるべき行動予測が存在しないがゆえに、システムなのである」(Luhmann, 1984, S. 157)。

システムは、最終的結合状態(最終的所有、永遠の確かな愛)というものが存在しないことによって維持されているということである。(シンボリックによる)結合は(ディアボリックな)分離によって可能となっている。

よりルーマン的な表現をするならば、「…それゆえ秩序は、偶有性 (Kontingenz) の否定としてではなく、偶有性の再構築として捉えられねばならない」(Luhmann, 1975, S. 95)。システム(秩序)は“不安定であるがゆえに”存在しているのである。その不安定さの根本=システムの作動因が、(近代社会が生み出した)それぞれのシステムに独特の分離と個別化にある。

したがって、ジンメルやルーマンが指摘してきたポイントを踏まえるなら、《分離されることが結合の条件である》という認識が重要となる。より正確には、近代社会に出現した、ある特定タイプの社会的分離が、それに対応した結合の一般化を要請したのだということである。

これまでの議論を整理しながらダブル・コンティンジェンシーとディアボリックなものとの関

わりを示すと、以下のようにまとめられる。

顕在的位相
貨幣：貨幣メディア以外の要素を切り捨てること 愛：愛というメディア以外の要素を切り捨てること
基底的位相
貨幣：＜支払う／支払わない＞という不確定性 愛：＜愛されている／愛されていない＞という不確定性

貨幣の場合も、愛の場合も、ディアボリックなものは、同種の二つの位相を有しており、顕在的位相は＜他の要素との関係＞において、基底的位相は＜それ自身の不確定性＞という点において、ディアボリックな契機を構成している。

その場合、そもそも何ゆえにシンボリック・メディアが要請されたのかという原点に戻って考えるならば、貨幣の場合には、個人単位の所有と財の移動という社会的要請が、新たな形でのダブル・コンティンジェンシーを出来させ、言わば「共有の喪失」が、新しい形での経済的結合をシステム化せねばならなかったという事情がある。近代人は、共同で持つことを放棄することによって経済的近代化を達成したがゆえに、個別的所有権とその移動を確保するために、貨幣というメディアの一般化を必要とした。

愛の場合には、近代的な親密性形成に伴う関係の恒常的不確かさを超えるべく、愛を確かめようとすることの連鎖において愛のコミュニケーションは形成・維持されている。それは、近代的個人と、近代的親密圏の形成がもたらした、「同じ心」の喪失を、愛という独特のシンボリック・メディアで繋ぎなおしたということである。近代人は、他者と自分が同じ心持ちであることを前提としないという選択をしたのであり、そうであるがゆえに、他者と心情的に結びついていないことは、個別的な心的結合を形成するための独特のメディアを必要としたということになる⁽⁶⁾。

2 シンボリック・メディアと近代

貨幣と愛というシンボリック・メディアについて検討した上記の事柄は、他の、例えばルーマンが代表的な象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアと呼んでいる、権力と真理にも当てはまる。

上述の、貨幣と愛についての考察を踏まえて整理するならば、これら諸メディアが近代社会の進展とともに象徴的一般化の働きを担ったこと背景には以下の状況があったと言える。

貨幣：財を共有せず、個々人が個別的に所有と交換を行うことが一般化した。

愛：他者との心情的分離を前提とし、それぞれが別々の心を携えて個別的な心的コミュニケーションを行うようになった

権力：伝統と自然に基礎を持つ共同行為が失われ、人々が共通の規範と権威に自然に従属しているという想定が困難となった。

真理：認識の調和的一致が存在せず、個々人が別々の仕方でも思考することが一般化した。

やや乱暴な図式化であることを承知の上でモダニティと関係づけるならば、これら諸メディアの発達は、近代という時代が、それ特有の分離の様式に基礎を置いていたという事実に裏付けられていたと言える。

前近代社会が、共同体的な集团的結合の存在によって成り立っていたとすると、近代社会は、ギデンズが「脱埋め込み化」(disembedding) という表現で要約するような、前近代的集団からの個々人の分離によって特徴づけられる。前近代社会から脱埋め込み化された諸個人は、再び近代的集団(近代家族、地域社会、近代的諸組織・集団、社会階級、国民国家etc.)に包摂され「再埋め込み化」された。

このような社会的事情を総括的にうまく説明する理論がパーソンズ的な社会統合の理論であった。個人は社会的に共有された「共有価値」を内面化しつつ、それぞれの意志で自由に行為する。分化した社会的機能を担う諸集団も、そのような共通の価値・規範を背景として動くがゆえに、近代的な分離は近代的な結合によって統合された。それを円滑に進めたのが貨幣に代表されるシンボリック・メディアである。

ギデンズとベックは、近代的な埋め込み化が制度疲労を起こして(あるいはその役割を達成して)、新たな形での再・脱埋め込み化を求める時代が「第二の」「再帰的」近代であると言う。国家、階級、家族などの「第一の近代」に形成されたカテゴリーは、「個人化によって、すでに死んでいるが、依然として生き残っているゾンビカテゴリー」となっている(Beck/Beck-Gernsheim, 2002, p. 203)。

その具体的様相は、リスク社会、個人化社会、グローバル化といった形で現れているが、そこで起こっていることは、なるほど近代的「埋め込み化」からの再・脱埋め込み化ではあるが、より正確には、新しい形での分離が一般化しつつあると言うべきであろう。

個人(自律的個人)が社会(近代的社会集団)に包摂されるタイプの《包摂・内在》型の社会(三上、2013)から、何らかの集団に所属するのではない「個人」そのものが、「初めて、社会的再生産の基本的単位となった」社会が形成されつつある(Beck/Willms, 2004, p. 63)とすると、そこにあるのは、これまでの近代社会とは異なったタイプの分離と個別化である。

ベックやZ・バウマンの言葉を用いるなら、新しいタイプの「個人化」社会であり、ルーマンの用語ならば「社会システムと意識(心的)システムの峻別」であり、F・デュベならば「行為

者とシステムは別れたのである」(Dubet, 1994, p. 14) という事態である⁽⁷⁾。

そのような事態を説明するために求められる社会理論は、これまでのような（そしてベックやギデンズが無自覚的に志向している）シンボリズムではなく、ディアボリズムに立った理論構成である。

その際にも、近代社会が発展させてきたシンボリック・メディアがご破算になるわけではない。むしろ、それらの諸メディアは、時代の要請に応えながら変容しつつ、よりいっそう効率的なコミュニケーションを媒介することになるはずである。近代的なシンボリック・メディアがディアボリックなもの働きによってはじめて可能になっていたことを確認し、その上で、新たな段階に入った分離と個別化に注目することが肝要である。

注

- (1) 「ディアボリック」という言葉を社会学的なキーが概念として使用したのは、ルーマが初めてであろう。ルーマンに影響を受けた研究者であるP・フクスは『ディボリックな視点』という表題の小著を上梓しているが、書名として使用しているのみで本文中には登場せず、言葉の説明もない。Ph・シャニアルはルーマンとは関わりのない文脈で「シンボリックなもの」と「ディアボリックなもの」の対比について触れてはいるが、残念ながら物足りない記述に終わっている (Chanial, 2013)。また春日 (春日, 2003) は、ルーマン貨幣論の解説書において、「悪魔的に一般化されたコミュニケーション・メディア」としての貨幣に注目している。ディアボリックなものという用語について、国内外の社会理論的研究で見受けられる使用は、今のところこの程度である。
- (2) 「シンボリックに一般化されたコミュニケーション・メディア」を、本稿では「シンボリック・メディア」と略記する。
- (3) ベックは個人と社会を、デュルケム由来の「人間性の宗教」(religion de l'humanité) と、新たに構想されるべき「コスモポリタニズム」によって架橋しようとしている。『〈私〉だけの神』(原題：自分固有の神) では、「デュルケムは個人化とコスモポリタン化の結びつきを先取りしている」(Beck, 2008, S. 126) とデュルケムを称賛している。

そういう意味では、ベックの理論は、彼自身がそう呼ぶように「第二の近代」(second modernity) の社会理論という名称がふさわしい。「第二の近代」の理論は、<デュルケム=パーソンズ>モデルという近代社会理論の祖型を踏襲しつつ、「第一の近代」の理論が持つ硬直性を再帰性という経路で弱めた、可変的なモデルとなっている。この点については [ベック、鈴木、伊藤, 2011] [三上, 2014b] も参照。
- (4) より厳密に規定するならば、顕在的位相には二つの下位的位相が区別される。〔1〕“他の社会関係からの分断”と、〔2〕“人々の分離”の区別である。ルーマンはこの点についても、必ずしも明確に区別せずに、両者を混在させる形の叙述をしているが、現実には生起する親密圏と愛のトラブルなどを見るならば、二つの下位的位相の区別を明確化しておく必要がある。

〔1〕は既に本文で指摘しているような、他のメディアや社会関係からの分離であるが、〔2〕はシンボリック・メディアが、正にそのシンボリックで包摂的な機能によって人々を分離してしまう位相である。貨幣ならば<富者と貧者>、権力ならば<権力者と服属者>、真理ならば<智者と愚者>、そして愛ならば<愛の勝者と敗者>を作り出してしまうという側面である。

このような〔2〕の形がもたらす分断は、しばしば暴力的要素を伴いながら、暴動、抑圧、蔑み、ストーカー・DVなどの病理を惹起することにもなる。身近な例としては、「親密性の変容」(A・ギデンズ) が抱える問題もその一つである。他の社会関係を捨象して愛だけで結びついている関係は、愛の形が少し変わったり不足したりするだけで破綻しやすく、そのために親密圏は困難な場として現れざるを

- 得ない。現実に顕在化するディアボリックなもの開口部は、様々な形で現れている。
- (5) 但し、愛は貨幣とは異なって、いったん支払ったからといって、所有権が確定するわけではない。かつてはそのような（愛を語るのは結婚するまでという）時代もあったが、ギデنزなども指摘するように、愛はその姿を変容させつつある。親密な関係は、あらかじめ愛があることの事前了解によって成り立っているのではなく、実際には、愛が不確かで、愛を確かめようとするものの連鎖によって維持されている。
- (6) ここで、シンボリックなものとの同時性を、類似した他の概念と関わらせて記述しておく必要がある。
- まずは「パラドクス」という概念との関係である。ジンメルやルーマンが掲げる“結合と分離の同時性”というテーゼは、その言語表現自体はパラドクスに見える。実際、ルーマンもパラドクスという言葉を多用している。しかし本稿での議論に限定するならば、シンボリックなものとの同時性は決してパラドクスではない。ある側面における分離が、別の形での結合を生んでいるのであって、両立困難な契機が並立しているわけではない。ルーマンが使用するパラドクスという用語は、(彼自身も断っているように) 厳密に論理的意味でのパラドクスとは区別しておく必要がある。「逆機能」とも区別しておかねばならない。ディアボリックなものは、シンボリックなものに対して逆機能的関係に立つわけではない。逆機能とは、例えば、組織分化が縄張りや閉鎖性を生んでしまうといったような、ある機能がきちんと働くことが、逆にそれに対してマイナスに作用する面をもたらしてしまうことを指す。シンボリックな契機とディアボリックな契機は、それぞれに異なった契機であり、一方の貫徹が、それとは逆の状況を生んでしまうということではない。ディアボリックなものとの顕在的位相は、逆機能的なものとして観察される現実を伴うことはあるが。
- (7) この点については、〔三上、2013〕などの文献で詳しく論じている。

文 献

- Beck, U. 2008 *Der eigene Gott*, Verlag der Weltreligionen. 『〈私〉だけの神』、鈴木直訳、岩波書店、2011年
- Beck, U. / Beck-Gernsheim, E., 2002: *Individualization*, Sage.
- Beck, U. / Willms, J., 2004: *Conversation with Ulrich Beck*, Polity Press.
- Burkitt, I., 2008 : *Social Selves*. rev. ed., Sage
- Chaniel, Ph., 2013 : La sociologique comme philosophie et morale. Et reciproquement.
- 日仏社会学会大会シンポジウム資料 (2013年10月26日、東洋大学)。
- Dubet, F., 1994: *Sociologie de l'expérience*, Seuil. 『経験の社会学』、山下雅之監訳、新泉社、2011年。
- Fuchs, P., 2010 : *Diabolische Perspektiven*. LIT Verl.
- Luhmann, N., 1975: Selbst-Thematisierung des Gesellschaftssystems, *Soziologische Aufklärung 2*. Westdeutscher Verl.
- Luhmann, N., 1982: *Liebe als Passion*, Suhrkamp. 『情熱としての愛』、佐藤・村中訳、木鐸社、2005年。
- Luhmann, N., 1984: *Soziale Systeme*, Suhrkamp. 『社会システム理論』(上・下)佐藤 勉監訳、恒星社厚生閣、1993-1995年。
- Luhmann, N., 1988: *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp. 『社会の経済』、春日淳一訳、文真堂、1991年。
- Parsons, T./Shils, E. A. eds., 1952 : *Toward a General Theory of Action*, Harvard Univ. Press.1967 『行為の総合理論をめざして』、永井道雄他訳、日本評論社1960年。
- Simmel, G., 1900: *Philosophie des Geldes*, Rammstedt, O. (Hg.), Gesamtausgabe, Bd.6, Suhrkamp, 1989. 『貨幣の哲学』、居安 正他訳、ジンメル著作集2、白水社、1994年。
- Simmel, G., 1909 : *Brücke und Tür*, Landmann, M. (Hg.), Koehler, K. F. Verl., 1957
『ジンメル著作集12 橋と扉』、酒田健一他訳、白水社、1976年。

- ベック・U、鈴木宗徳、伊藤美登里編、2011：『リスク化する日本社会』、岩波書店。
- 春日淳一、2003：『貨幣論のルーマン』、勁草書房。
- 三上剛史 2012：「ディアボリックなものとしンボリックなもの」、『日仏社会学年報』、第21号。
- 三上剛史 2013：『社会学的ディアボリズム』、学文社。
- 三上剛史 2014a：「公共圏と親密圏のディアボリズム」、田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』、京都大学学術出版会。
- 三上剛史 2014b：「リスク社会と理論的シンボリズムの隘路」、『社会学研究』、第94号。